

冬芽の人

役員室に書類を届けた帰り、七階の廊下で牧しずりは営業二課長の中崎とすれちがった。中崎は常務の佐伯に呼びだされていたようだ。噂どおり佐伯が次々期の社長になれば、中崎は一気に昇進の階段を駆けあがるだろうといわれている。

しずりにとって、しかしそれはどうでもよいことだった。中崎はいい上司だ。細かいことにはこだわらず、全体として部下をひっぱっていく力がある。体育会系ではあるが、人の扱いに繊細さが欠けるような押しつけがましさもない。女子社員に人気があった。

「今日、でないのだったって？」

目礼して通りすぎようとしたしずりに、中崎が声をかけた。今日もといわないのが、人気のある理由だろう。その日は、営業一課二課合同の忘年会が開かれる。しずりは入社して以来四年営業二課にいるが、一度も忘年会にでたことがなかった。

「はい、申しわけありません」

下を向いたまま、答えた。

「そうか」

中崎は息を吐き、顎をかいた。

「いつかでられるといいな。たまにはいっしょに騒ごう」

思わず中崎を見た。中崎の目に邪心はなかった。本心からそう思っているように感じる。

「不調法なもので」

いつてから後悔した。それが理由での欠席などありえない。二課には十四名の人間がいるが、下戸は他にも何人かいる筈だ。しずりを嫌っている浅野香織も下戸だが、忘年会に限らず、飲み会を断わる姿を見たことはなかった。

しかし中崎はつつこまなかった。小さく頷くと、言葉を探すようにしずりを見ていた。そのまま立ち去らなかつたのは、中崎に対するしずりの精一杯の譲歩だった。忘年会にでないのか。はい、不調法なもので。それでは失礼します、では、あまりに感じが悪い。課内でしずりが浮いていることは誰もが知っている。それを無理に溶けこませようとしていない中崎に、しずりは感謝していた。

「皆でわいわい、というのが苦手なのかな」

「は」

中崎は顎を再びこすった。

「だったら、サシでいくか。今度」

しずりは驚いた。それが伝わったのか、中崎は早口になった。

「あなたはよくやってる。例のシンガポールの件でも、向こうのミスを最初に見つけたのはあなただろう。何ていうか、落ちついた仕事ぶり、安心できる」

「いえ。まだまだ慣れません」

「一回、ちゃんと話をしたいな、と思ってるんだ」

「ありがとうございます。そんな風におっしゃっていただくだけで光栄です」

再び目を落とし、いった。

「おおげさなことをいわないで。チームなのだから。じゃ、年明けでもさ、声をかけるから。飯でも食いにいこう」

中崎はいつてからほっとしたように息を吐いた。しずりは頷く他なかった。

本当は迷惑だった。一対一で食事などしたくない。自分のことをあれこれ詮索されるのは目に見えている。

中崎にとってはそれも仕事だろう。だがしずりは放っておいてほしい。協調性のない変わり者にとられてるほうが楽なのだ。

中崎が歩き去った。

しずりは息を吐いた。怒りも悲しみもない、一本の線として生きよう。四年前にそう決めていた。一本の線がずっとつづき、やがて人生の終盤が訪れたとき、すべてをおだやかに思い返せる日がやってくる筈だ。

そのときまでは、モノトーンの日々でかまわない。

2

望まない贈りものを受けとり、しかもそれを返すことができない。理不尽で、消化のできない感情だけが残る。

前田の墓参りにくるたび、しずりはそんないらだたしさを覚える。

「前田家之墓」は、文京区千駄木の浄源寺の墓所にある。墓には、前田とその両親が入っている。

前田の命日は、十一月二十二日。しずりは十二月の二十日前後に参ることにしていた。

墓石には、先月の命日に手向けられたらしい花と新しい卒塔婆が立っている。新たな花をさし、線香を点して手を合わせた。

十二月第三土曜日の夕暮れが迫っていた。せわしない羽ばたきとともにカラスの鳴き声が降ってくる。日が陰ると、冷気が足もとから這いあがってきた。

大脳にうけた傷で前田が昏睡状態におちいったのは、六年前の九月だ。前田は四十一歳、しずりは三十歳だった。

それから二年間、前田は意識を回復することなく生きた。医師の話では、脳幹の機能は残っていて、自発呼吸もできる、したがって回復する可能性がゼロではない、ということだった。

しかし病院内で肺炎をおこし、死亡した。

前田が死亡したとき、しずりは警察を辞め、今の職場にいた。前田が短期間で意識を回復していれば、警察を辞めることはなかったろう。昏睡状態がつづけばつづくほど、回復の可能性は低くなる。一年を超えたとき、しずりは退職を決心した。

葬儀にはきてほしくない——前田の妻、えりがいつている、と人伝てに聞いた。しずりは誤解をとく機会がとうとう与えられなかったことを実感した。

誤解とは、前田としずりの関係だった。ベテランの前田に刑事になって日の浅いしずりがベアリングされたのは、警視庁の人事としては、当然だった。

前田は刑事としても有能だったが、それ以上に野心家だった。交際範囲も広く、その中

には女性との交友関係も含まれ、いずれは警察を辞め、事業を立ちあげると周囲に広言していた。

——このままいけば、日本の治安は悪くなる一方だ。俺はボディガードの会社をやるように思ってる。要人警護って奴だ。牧もそんなときは入れてやる。女のボディガードは、男より需要があると思うんだ

張りこみ中の車中で、前田がいったのは、村内に襲われる二日前だった。

——せっかくですけど、わたしは今の職場でけっこうです

——つれないことをいうなよ。お前なら女子部門の責任者になれる。見てくれも悪くないし、腕だつてそこそこたつだろう

前田は小さな目を大きくみひらいて、まじまじ、しずりを見つめたものだ。

——スタイルがいいからよ。向こうの映画みたいに、バシッとスーツ着て、サンングラスかけたら、格好いいぜ。俺が金持だったら、お前みたいな女に一日中、ボディガードしてもらいたいね

しずりは首をふり、相手にしなかった。セクハラという言葉は、警察ではほとんど通用しない。もともとが、男の社会なのだ。

軍隊と同じだ。性別に関係なく同じ仕事を求められ、男女の差異を職場にもちこめば、

それは即、セクシュアルハラスメントにつながる。

公にはもちろん、あつてはならないことだろう。警視庁には防止規程があり、セクシュアルハラスメント相談員の制度もある。しかし捜査の最前線で、女だというだけで周囲が言葉づかいや態度に配慮を加えるのを期待はできない。

だいたい、女性警察官の数など、たかが知れている。二十五万五千人の全国警察官の中で、わずか一万四千人だ。警部以上の階級は百五十名足らずに過ぎない。

二十人にひとりしかいない女性警察官の配属はおのずと限られてくる。性犯罪や交通犯罪が中心で、強盗や殺人といった強行犯を対象にした捜査にたずさわることが、まずない。

しづりが一課に配属されたのは、特例といえた。

自分が優秀な刑事だったという自覚はない。ただ粘り強い、それだけはいえた。ひとつひとつの可能性を探り、それを自ら潰して歩く作業をつらと思ったことはない。

花みたいなものだ——誰かがいつているのを聞いた。男ばかりのムサイ職場にも花を一輪飾れば、なんとなく和むだろう。だからおねえちゃんをもってきたのさ。

そうかもしれない。別にそれはそれでかまわなかった。強盗や殺人などの被疑者とわたりあうのを恐しいと感じたことはなかった。

単独で対峙する機会などありえない。常にペアで捜査にあたるのが基本だし、被疑者逮

捕やガサ入れのときは何人ものグループで乗りこむ。抵抗が予想される被疑者の場合は、しづりは後方で待機するように命じられた。それも抗弾抗刃ベストを着用し、拳銃も装備した上で、だ。

しづりの拳銃射撃術は上級で、女性警察官としてはトップクラスだった。だがそれも修練の結果というよりは、たまたま才能があつたというに過ぎず、オリンピック選手候補になりたいとも思わなかったし、そのための合宿参加も辞退した。どのみち、女子射撃部門は、同時期に女性自衛官に天才的な選手がいたので選ばれることはなかったらう。

そんな自分が一対一で強盗殺人犯と対決しなければならなくなったのは、なぜなのだろう、と思う。

偶然、としかいいようがない。前田とともに向かった訊きこみ先でぶつかってしまったのだ。

前田には予感があつたのかもしれない。なぜかといえば、その日に限って拳銃を着装していたのだ。

事件は、六年前の七月に練馬区内で起こっていた。奥平正という独り暮らしの老人が自宅で殺害され、屋内が荒されていた。所轄の石神井署に強盗殺人事件の捜査本部がたち、しづりは前田らとともに配置された。

通常、捜査本部の設けられる重大事件捜査においては、警視庁本庁所属の刑事は、本部のおかれた所轄署の刑事とペアで捜査にあたる。だがしずりはまだ新人ということで、前田と本庁どうしのペアを組んだ。前田がそれを希望したのだ。

しずりが一課に移ってひと月足らずの時期だった。だが一課にあがる前、しずりは所轄署刑事課や本庁生活安全部での勤務経験があった。だから多少は「お荷物」になるかもしれないが、石神井署の刑事と組んでもさほど問題ではなかったと思う。

にもかかわらず、前田がしずりとのペアを希望したのには、明らかな理由があった。

前田とは、生活安全部でも同僚だった。その頃から前田が自分に好意をもっていることに気づいていた。

食事に酒に、何度も誘われた。新米刑事だったしずりは、初めの頃は、先輩の知識を吸収しようと、積極的にそれにのつた。

が、やがて前田が男女関係を自分に求めていると知り、困惑した。

前田は妻帯者だ。子供はいないようだが、相手が独身だろうが既婚であろうが、当時のしずりには恋愛をできるような精神的余裕はなかった。

刑事として早く一人前になりたい、頭にあつたのは、それだけだ。

自分を利用したのかもしれない。あとになってそう思い返した。前田の好意に、自分に

対する欲望に、のるふりをしながら捜査のイロハや勘どころを教わった。

前田は熱心に、それこそ手とり足とりでしずりに教えた。そしてことあるごとに、ホテルにいこうと誘った。

しずりは断わりつづけた。唇は、しかたなく許したが、そこから先の行為はがんとして拒んだ。

前田は失望はしたようだが、怒ることはなかった。

気長に口説くさ、お前がその気になるまで——苦笑していた。

やがて前田に転属の辞令が下った。発足したばかりの組織犯罪対策部への異動だ。しずりも所轄署に異動が命じられた。

二年後、再び同僚となったのが捜査一課だった。

足音に我にかえった。押し詰まった暮れのこの時期、夕刻の墓参者に会うことはかつてなかった。

ふりかえると、水桶を手にした若者がすぐ背後にいて、息を呑んだ。

「すいません」

若者が先に口を開いた。

「いえ」

しずりは首をふった。再び墓石と向かいあう。すぐ近くの別の墓に参りにきたのだと考えたからだ。

「あの」

若者がしずりの背中に呼びかけた。再びふりかえった。正面から見る若者の額に、きれいな形をしている、としずりは思った。整った富士額だ。軽くウェーブのかかった長髪をまん中から分けている。ダッフルコートにジーンズという姿は、学生に見えた。

「ありがとうございます」

礼の理由がわからなかった。無言で見かえすしずりに若者がいった。

「父、です」

しずりは首を傾げた。人ちがいだらう。いや、墓ちがいというべきか。

「前田光介です。僕の父です」

「えっ」

思わず声のでた。まじまじと若者を見つめた。若者らしい、ぬくもりのある体臭を感じた。不快な匂いではなかった。

「ご存知ないかもしれませんが。僕の母は、二十代で父と離婚しました。今の奥さんは、次

の、人です」

「知らなかった」

ようやく言葉がでた。

「あの、今の奥さんは、僕という子供がいるのをすごく気にしてたみたいで、父はあんまり人に話せなかったらしいです」

「そう、なんですか」

若者はじっとしずりを見つめている。

「父の、同僚だった方ですか」

その視線のまっすぐさがつらい、と思ったとき、訊ねてきた。

「はっ」

しずりは低い声で答えた。頭の中はまっ白だった。知りあったとき前田は三十八だった。一度も前田の口から、子供がいるという話を聞いたことはない。いや、今の結婚が再婚だ、というのも。

「もしかして、牧さん、ですか」

しずりはすっと息を吸いこんだ。不安と緊張が一気にこみあげた。

「はっ」

責められるのだろうか。責められてもしかたがない。しずりは体がこわばるのを感じた。だが不意に若者は頭を下げた。

「父が、お世話になりました」

「そんな……ちがう」

思わずしずりはいつていた。

「いつも病院にきて下さっていたとうかがっています。植物状態になってからも」

しずりは無言で首をふった。若者に何を、どういつてよいのか、まるでわからない。お父さまは、わたしをかばって亡くなった、申しわけありません——そう口にすることが恐かった。この若者はどこまで知っているのか。

「あ、お参りしなきゃ」

若者が思いだしたようにいつて、微笑んだ。しずりは道を譲った。若者は進みでて、水桶からくんだひしゃくの水を墓石にかけた。空になるまでかけ、かたわらに水桶をおくと、腰を折つて、手を合わせた。

しずりももう一度、手を合わせた。

「仲本岬人です」

直るといつた。

「仲本さん」

「はい。母の姓です。岬人は、岬の人、と書きます。父がつけたそうです」

「牧しずりです」

仲本岬人は頷いた。

「牧さんのお名前は、母から聞きました。母は、父の同僚だった方から聞いたそうです。

今の奥さんは、母や僕に会うのは嫌だったらしくて」

「何て、聞いたんですか」

しずりは訊ねていた。岬人は小さく首を傾げた。

「何て、とは？」

「わたしのことを、です」

「父が怪我をしたとき、いつしよにいた人だ、と」

「それだけですか」

思わずたたみかけていた。岬人はもう一度、首を傾げた。

「他に、何か、あるんですか」

しずりを見つめる。その目にしずりは急いでいつた。

「あの、そうじゃなくて。わたしとお父さまの関係のことではなくて」

いつてから後悔した。これではよけいに疑問をもたせるだけだ。岬人はやはり眉をひそめた。

「父と、何か」

「ちがう。ちがいます」

しずりは何度も首をふった。

「わたしとお父さまは別に、そういう関係ではありません。先輩と後輩。お父さまに仕事を教わっていました。わたしがいいたいのはそうではなくて——」

不意に何を、どう説明すればよいのかわからなくなった。岬人は無言で見つめている。

その表情に怒りや不審はない。ただ不思議そうに見ているだけだ。

しずりは大きく息を吸い、訊ねた。

「少し、時間、ありますか。お話をしたいので」

3

寺から不忍通りに降りる坂の途中に、小さな喫茶店があった。テーブル席がふたつしかない。客はおらず、しずりは岬人と向かいあった。

「わたしは今、警察官ではありません」

まず、しずりはいった。岬人は無言で頷いた。口数の多い若者ではないようだ。その点では、父親似ではない。顔も、似ていると思えるのは、頬から顎にかけての輪郭くらいだ。

小さくて細い目をしていた前田に比べ、岬人の目は切れ長で、どこか品のよさと冷たさが同居している。色白で、すっとした鼻筋も、父親とはちがう。

「お父さまが生きてらしたときに、辞めました。五年前です。今は、OLをしています」

「そうなんですか。じゃ、あの、一年あとくらいに」

「ええ。一年は、勤めました。でもお父さまが意識を回復されないので、だんだん……」
言葉が途切れた。うつむいた。

「あとう」

岬人がいい、しずりは顔をあげた。

「何があったんですか。牧さんが僕に何を話したいのかわからないんです」

しずりは何度も深呼吸した。警察を辞めたあととなった軽いパニック障害の発作が起こりそうだった。

「待って」

目を閉じた。頭を無にして、呼吸を落ちつける。ようやくふつうに息ができるようにな

ると、心配そうな岬人の顔がのぞきこんでいた。

「大丈夫ですか。どこか具合が悪いとか」

「いいえ、大丈夫。ごめんなさい」

しずりはバッグを開けた。こういうときだけ手にする煙草をとりだした。警察を辞めてから身についた習慣だ。

「煙草、吸わせてもらっていますか」

小さな丸テーブルの上には陶器の薄い灰皿がある。しずりは煙草に火をつけた。封を切つてから一カ月近くがたったセーラム・ライトから、メンソールの香りはほとんど消えていた。バッグに入れてはいるがお守りのようなもので、実際に吸うのは久しぶりだった。

岬人は無言で待っている。半ばほど吸った煙草を灰皿に押しつけ、しずりは口を開いた。

「お父さまとわたしは、強盗殺人事件の捜査にあたっていました。練馬の一軒家に住んでいたお年寄りが殺され、屋内が物色されていたんです。犯人を特定できる証拠品が少なく、捜査は難航していました」

捜査本部が設けられてから三週間が経過していた。犯行は流しのプロによるものという見かたが固まりつつあった。屋内の荒しかたや遺留品の少なさがそれを物語っていた。

被害者の奥平正の死因は刃物による刺傷で、凶器に台所にあつた包丁が使われたことが

判明していた。犯人は深夜奥平宅に忍びこむと、まず台所から包丁を奪い、寝室にいた被害者を襲つたのだ。侵入経路は台所勝手口からで、錠前はピッキングで破られている。

時間の経過に伴い、解決は難しいという空気が捜査員のあいだに漂いだした。訊きこみ対象者の記憶は薄れていく一方だし、プロの犯罪者なら、犯行現場周辺には当分近づかないことが予想されるからだ。

「あの日、出勤したわたしにお父さまはある男のところへ訊きこみにいく、といました。以前いた部署で名前のでたことがあるプロの泥棒で、その男が怪しいというよりは、同じような仕事をしている人間の情報をとりにいきたいという口ぶりでした」

男の名前は村内康男。窃盗による服役歴があり、生活保護で暮らしているという。年齢は五十一歳、住居は江戸川区のアパートだった。

練馬区から江戸川区まで、ほぼ東京を横断して二人は向かった。アパートは交通量の激しい環七通りに近い場所にある二階建てだった。

「村内康男は二階の端の部屋に住んでいました。わたしとお父さまはアパートの外階段を登って村内の部屋の前に立ちました」

思いだすと自然に呼吸が荒くなった。少しさがっているように前田はしずりに指示し、アパートの扉をノックした。

『村内さん、村内さん』

誰だ、というくぐもった声があるのをしずりも聞いた。

『警察の者です。ちよつとおうかがいしたいことがあつてきました。開けてもらえますか』

錠を外す音がして、扉が開いた。頭頂部が禿げた、目つきの鋭い男が姿を現わした。それが村内だった。村内はまず前田を見て、次にしずりを見た。ひどく険しい視線で、しずりは不安を感じた。警官を恐れているというよりは憎んでいるような目だったからだ。

『何だ』

にらみつけるような村内に前田はおだやかな口調で話しかけた。

『お忙しいところを申しわけない。実はある事件のことをちよつと調べていまして……』

話しかけながらも前田はアパートの三和土に踏みこんだ。扉が半ば閉じ、前田の背が隠れた。話し声が低くなり、しずりの耳に届かなくなった。

しずりは扉に近づくべきかどうか迷った。前田はベテランの刑事らしく、下手にでて村内の協力をとりつけようとしている。そこへ女の自分がしゃしゃりでたら、村内の機嫌を損ねて、情報をとりそびれる危険があつた。

しばらくは静観するしかない、そう決めたときだった。

不意に怒鳴り声があがつた。

『手前！』

村内が叫んだのだ。はつとして近づこうとした扉が大きく開いた。三和土にいた前田をつきとばし、村内がとびだしてきた。そこに前田が追いつがった。

『村内！ 抵抗するか！』

村内はいきなりしずりに襲いかかつてきた。身がまえる余裕もなかった。しずりは悲鳴をあげ、アパートの廊下に押し倒された。わき腹を強く打ち、息が止まった。

しずりの上に村内が馬乗りになった。そこへ前田がとびかかった。上着のすそがめくれ、腰の拳銃ケースが見えた。

『よせ、村内！ 離れる』

二人はひとかたまりになって廊下を転がった。勢いでアパートの外階段を落ちた。

激しい音をたてて、上になり下になりながら前田と村内は階段を転がり落ちた。はねあがつた村内の足がはいた靴下の底が破れていたのを、しずりは鮮明に覚えている。

『前田さん！』

身を起こしたしずりが階段に駆けよると、前田を下にして二人が地上に倒れていた。

『前田さん！』

しずりは階段を走り降りた。村内が身を起こした。前田がいよいよ首を動かした。

立ちあがった村内がふらつきながらも駆けだした。アパートの横に自転車置き場があり、その一台にしがみつく尻をのせた。

『待て！ 待ちなさい』

しずりは横たわっている前田にようやくとりついた。前田の手が動いた。いけ、いけ、というように振られる。

『ほ、し』

と口が動いた。そして拳銃ケースを示した。

『もってけ……』

しずりは固まった。

『はや、く……。はやく……。』

『救急車を呼びます！』

『馬鹿っ』

前田が苦しげに叫んだ。そんなことより村内を追え、といっているのだった。

手が震えた。が、しずりは前田の腰のケースから拳銃を引き抜いた。しずりが支給され

ているオートマチックタイプよりも少し大きいリボルバーだった。が、扱ったことはある。

『追ええ』

前田がいった。その語尾が不意に途切れた。声を出すことで余力をすべて使いきってしまったかのように、体が痙攣した。

しずりは走りだした。手に重たい拳銃をもったまま、村内が自転車でいったあとを追った。

数十メートルも走ると、環七通りにぶつかった。左右を見た。村内が歩道にいた。やはり体のどこかを痛めたのだろう。大きく左右に揺れながら自転車をこいでいる。よたよたとして、スピードはでない。

『待ちなさい！』

しずりは叫んであとを追った。村内がよろけ、足をつくのが見えた。右手の指を拳銃の握りに巻きつけ、銃口を下に向けたまま、しずりは走った。

体勢をたて直そうと、ハンドルをもちあげた村内がこちらをふりかえった。目がみひらかれた。しずりと手にした拳銃を見てとったのだ。

そして不意に自転車の向きをかえた。環七通りをつつきろうとした。

重々しいクラクションの音が響き渡った。急ブレーキにタイヤがあげる悲鳴がつづき、

ドスンという大きな衝撃が伝わり、自転車ごと村内の体が宙を舞った。

地面に落下したときも、大きな音がした。

次の瞬間、あたりが静まりかえった。すべての車が止まり、人も凍りついていた。

村内はひしゃげてぐにやぐにやになった自転車と一体になり、路上に横たわっていた。大型トラックにはね飛ばされたのだ。

「村内をはねたのは、すぐ近くの一之江のターミナルから浦安の鉄鋼倉庫に荷をとりに向かっていた大型トラックで、村内は全身打撲で即死でした。遺体から採取されたDNAと奥平宅で見つかった毛髪のDNAが一致し、事件は被疑者死亡で送検されて解決しました。お父さまは救急車で病院に運ばれ、頭をひどく打っていることがわかり……」

しずりは言葉を切った。ここからは説明する必要はない。

しずりが責任を問われることはなかった。村内が環七通りにとびだしたのは、逃亡をはかるためで、しずりに撃たれる危険を感じたからではなかった。しずりは止まれ、とはいったが、撃つとはいっていない。

一方で、前田と村内のあいだでどのようなやりとりがあつて、ああいう結果になったのかは不明だった。

前田には、村内が犯人だという確証があつたわけではない。もしあつたなら、しずりひとりだけを連れて会いに行く筈はなく、軽率のそしりは免れない。

ならばなぜ、ほんのふた言み言の会話で、村内が犯人だと前田は見抜き、それに気づいた村内は逃亡しようとしたのか。

村内ほどのプロなら、たとえ「クサイ」と刑事に疑われていると感じても、確証をつきつけられるまではシラをきるのが当然の反応なのだ。

事情聴取でも、前田が事前に村内に関する情報を何かもっていなかったのかと、しずりは何度も訊かれた。

しずりはわからない、としか答えようがなかった。生活安全部か組織犯罪対策部にいたときに村内の名を前田は知り、ただ訊きこみに向かったのだとしか考えていなかったからだ。

結局、前田はまぐれ当たりをしてしまったのだろう、という結論になった。捜査の現場ではたまにあることだ。

通常、まぐれ当たりをしても、刑事はその場で、「お前が犯人だろう」とはいわない。素知らぬ顔をしてその場はひきあげ、改めて被疑者を包囲する態勢をとる。

功を焦つたのか、うっかりしたのか、前田は村内が「本ぼし」であると気づいたのを勘

づかせてしまい、抵抗にあったのだ。その責任を感じていたので、しずりをかばった。

ただ村内のアパートからは現金を除けば、奥平正から奪ったと思しい品は見つからなかった。ひとり暮らして、近所づきあいもほとんどなかった奥平の家から、どんな品が奪われたのか、警察はつきとめていなかった。

「お父さまはわたしを助けようとして、村内にとびかかったのです。その結果、大怪我を負ってしまった。ぼんやりしていたわたしの責任です」

しずりは下を向いたままいった。本音は少しちがう。被疑者の家を訪ねるとわかっていれば、もう少し対応はちがった。少なくとも、いきなりつき倒されて馬乗りになられるような失態はおかさなかった。

しかし自分を救った前田がひと言も状況に関する説明をすることなく死亡した今、それ以外の言葉はすべていいわけにしかならない。

特に、前田の妻、えりに対してはそうだった。

前田の運ばれた病院で、しずりは初めてえりに会った。青ざめてはいたが気丈にふるまっていたえりが一瞬感情的になったのが、しずりと対面したときだった。

責任を感じているとうつぶいたしずりに、

『あなたが牧さん。そう、主人が身がわりになった人ね』

といいはなったのだ。しずりの心は凍りついた。つづいた言葉は明らかに二人の関係を疑っていた。

『あなたのためなら、主人は命を投げだすのもいとわなかった』

それは、といい返しかけ、しずりは言葉を呑みこんだ。前田が自分に好意をもっていたのは、しずり自身も認めざるをえない事実で、課内でも多くの同僚が感じていたろう。一方で、しずりがその好意に応えなかったのを知るのは前田ひとりだ。

だがこの場面で、わたしとご主人とは男女の関係ではありませんでしたというのは、責任逃れにもならない。実際の関係がどうあれ、えりは夫がしずりに好意をもったことを許せず、それがこの事態につながったのだと考えている。

自分が誘惑をしたわけでもないし、本当はむしろ迷惑に感じるこのほうが多かった、そういいたい気持をしずりは押し殺した。

前田の意識が回復しさえすれば、えりの「誤解」がとける、それを願う他ない。

「牧さんに責任があるとは思いません。たとえ父があなたをかばった結果、ああなったのだとしても、僕は男として警官として、それは当然の行為だと思います。父を誇りに思っています」

岬人はいった。しずりは顔をあげた。わずかに岬人の頬が赤らんでいた。

「ありがとうございます」

「でも、牧さんはどうして警察を辞めたのです？ 父だってそれを望まなかったと思うんですが」

しずりは息を吸いこんだ。自分と前田の関係を、警察の同僚たちまでもが疑っていたことは、この若者に話せなかった。

しずりに対する風あたりは決して強くはなかった。むしろ腫れものにさわるようだったとすらいえる。

だがしずりをかばえばかばうほど、内部の空気は、前田のとった捜査に対して厳しいものになる。

本ほしかもしれない人間への訊きこみに、なぜ新人の女性刑事ひとりしか連れずに向かったのか。

前田が拳銃を携行していたのが、かえってのちにその疑惑を強めた。事前に何らかの情報を得ていた前田が、彼女の前のいいところを見せようとしたのではないか。さらに憶測すれば、彼女に手柄をたてさせる目的があったのではないか。

男性社会である警察組織は、一方でひどく女々しい側面をもつ。無責任な噂話や出世する者への陰口、派閥争いに伴う足のひっぱりあい、外には決して開かれない理解されに

くい集団であるだけに、一度そうした揣摩憶測の対象となると、精神的苦痛はなみたいていではない。

「資格がない、と思ったんです」

だがそれを岬人に説明することはせず、しずりは答えた。

「この先、わたしには警察官をつづけていく資格がない。それはお父さまのこともそうでしたが、村内という被疑者を死なせてしまった責任も感じたんです」

「でも、事故だったのでしょうか」

しずりは頷いた。

「村内をはねたトラックの運転手は君津という人でした。君津さんにとっては、災難でしかなかったでしょう。まさか目の前に自転車に乗った男がとびだしてくると思わなかったでしょうから」

おそらくは村内も、階段を落ちた衝撃でもうろうろとしていたのだ。それが逃げたい一心で車道にとびだした。しずりに判断力があれば、防げた事態かもしれない。

「道路交通法では、たとえ自殺に等しいようなとびだしであっても、運転者は責任を問われます。プロのトラック運転手であった君津さんにとっては思いもかけない不幸だったと思います。それに対する責任も、わたしにはあります」

トラックを降りてきた君津は呆然とした表情を浮かべていた。しずりとさほど年齢のかわらない、三十そこそこに見えた。首に巻いていたタオルを口に押しあて、村内のかたわらに膝をついて、

『なんで、なんでだよ』

とくり返した姿を覚えている。

「私の不注意で、何人もの人の人生をおかしくしてしまっただんです。そんな人間に警察官の資格はありません」

岬人は言葉を失ったようにしずりを見つめている。

この言葉は真実だった。本当なら生きているのすら許されないのではないか。そう思いつめたことが何度もある。

しかし、自分とひきかえに命をさしだした前田という人間がいる以上、自殺する資格すら自分にはない。

あのととき村内に自分が殺されたほうがどれほど楽だったろう。数えきれないほどの眠れない夜の中で、部屋の闇に目をこらし、しずりは思ったことだった。

望まない贈りもの、それは自分の命だ。そしてもう決して返すことができない。

4

「課内の有志でさ、ちっちゃい忘年会やるんだけどこない？」

声をかけてきたのは、バツイチ独身で営業二課の“お局”と呼ばれている藤原麻子だった。

「牧さんも気兼ねなしでこられるメンバーだから」

小声でいいながら、藤原の目は浅野香織を見ている。営業最終日の今日、浅野香織は二人の同僚とともに、合コンに行くようだ。相手は大手商社の社員らしい。朝からはしゃいでいて、服装も襟ぐりの深いニットと腰の線がはつきりするタイトスカートという組み合わせだ。

「ありがとうございます。でも——」

いいかけたしずりの腕に、藤原麻子は手をのせた。

「予定があるなら誘わない。でも何も無いんだっつらつきあおうよ。つまんなかったら先に帰っていいし。ね」

しかたなくしずりは頷いた。

「そのかわり、カッコつけたようなレストランじゃないよ。下町の居酒屋。いい？」
「はー」

メンバーは藤原麻子の他に二人、どちらかといえば課内では地味な関口照美と坂本朋代だった。関口は二十二で若いのだが、浅野香織のような派手さは好まないようで、昼休みにはいつも本を読んでいる。坂本は化粧をほとんどしない三十代後半で、噂では韓流アイドルの追っかけにのめりこんでいて収入の大半を注ぎこんでいるという。

連れていかれたのは、近くの盛り場ではなく京成押上線の立石駅に近い居酒屋だった。ホルモンが名物だといい、もうもうとあがる煙がこもった広い店内には、男性客だけでなく家族連れも何組かつめかけている。

タオルを頭に巻いた店主らしき男が、開き戸をがたがたと開けた藤原に手をあげた。

「おう、アサコ。その席とつといてあつから」

「サンキュー、大将」

藤原は手をふった。

「いらつしゃい。こん中にコートとか入れな。匂いついちゃうから」

隅の席のテーブルに四人がつくと、割烹着をつけた中年の女がゴミ用の大きなビニール袋をもってきた。

「おばさん、ありがとう。リョーヘイ大きくなった？」

「毎日部活で遅いわよ。泥んこのユニホームを洗わされるこつちはたいへん」

「そっか。とりあえずホッピー四つと焼きとんの盛りあわせ」

「はいはい」

「葛飾区っていうからすぐく遠いところと思ってたんですけど、こんなに早くこられちゃうんですね」

珍しげにあたりを見回し、関口がいった。

「そうよ。あなたの家大森でしょ。ここから大森海岸なら押上で乗りかえて一本で帰れるわよ」

藤原が答えた。

「この店は？」

坂本が同じようにきよるきよるしながらいった。

「あたしの幼な馴染みの兄さんがやってるの。本当は予約なんてできないんだけど、今日は特別に頼んだ。地元でも有名な、おいしくて安い店なんだ」

確かに店内に貼られている短冊に書かれた品書きは、都心のサラリーマン向け居酒屋に比べて、かなり安い。ホルモン系の焼きとん以外にも、塩らつきょうとか小松菜おひたし

といったさっぱりしたメニューもあるようだ。

家族連れは、小学生くらいの子供を連れ、皆夫婦でホッピーや生ビールを飲んでいる。母親は例外なく、年のわりに太っていて髪を金色に染めており、父親はスポーツウェアのようなラフな服装で、若い頃はマル走（暴走族）のメンバーだったような雰囲気だ。

不思議なものだ、としずりは思った。十代の頃は、ケンカやクスリ、暴走行為で手がつけられなかった少女が、こうして人の親になり、まがりなりにも家族団欒のときを過ごす同じ場に、自分がいる。本庁生活安全全部でしずりは少年事件課に属していた。少年とはいえ、殺人や強盗、強姦といった大人顔負けの凶悪犯罪を起こす者も少なくなかった。

その頃の目で見れば、母親たちの多くに補導歴があり、父親は今でも地元のマル走や暴力団とつながっているように見える。それでも居酒屋の空気に溶けこみ、笑い声を響かせている。

「ヤンママってやつ、典型的な」

しずりの視線の先に気づいたのか、藤原が小声でいった。

「多いよ、このへんは。みんな、高校をでたくらいで結婚して子供生むんだ。旦那はたいい地元の不良で、解体屋とか運転手の仕事してる」

「恐そうですね」

関口がいうと、藤原は首をふった。

「大丈夫よ。頭悪から難しいこと考えなくて生きてる連中ばかり。そうね、あなたみたいに本ばかり読んでる子は変人扱いされるだろうけど」

「変人ですか」

関口は目を丸くした。

「そうよ。あたしはこの近くの金町ってところだけど、高校生の頃、本にはまって休みの日に家で本ばかり読んでたら、頭にムシが湧いたんじゃないかっていわれたもん。『あいつ本ばっか読んでる。おかしくなったんじゃない?』って」

「ええーっ」

ホッピーが届いた。関口は初めて飲むようだ。乾杯のあと、おそろおそろ口をつけている。

「でもさ、思うんだよね。どっちが幸せかはわかんないなって。子供の頃悪いこといっぱいしてさ、で同じような悪ガキとくっついて子供ぼろぼろ生んでさ、ギャーすか夫婦喧嘩したり、悪さする子供ひっぱたいて、あとはなーんにも難しいこと考えないで暮らしてく人生ってどうなんだろう。たとえば、うちの会社には、玉の輿にのりたいたい子がいっぱいいるわけじゃない。合コンとかして一流企業の旦那を見つけたらって思ってるような。勝ち

負けじゃないけど、どっちなんだろう」

藤原がしみじみとした口調になった。坂本が苦笑する。

「そんな、結論、先にいわないで下さいよ。それに、今ここにいるうちらは、そのどっちでもないじゃないですか」

藤原と関口が笑い声をあげた。しずりも思わず笑った。

「あ、珍しい。牧さんが笑った」

関口が嬉しそうにいった。藤原がいたずらっぽくいった。

「さつきさ、牧さんあの家族じつと見てたじゃない。何考えてんのかなって思っただけ」しずりは微笑んだ。

「同じようなことを考えてました」

坂本が訊ねた。

「牧さんて、うちにくる前はどこか別の会社だったんですか」

「ええ」

その先を全員が待っているようだ。

「小さな会社でした。潰れちゃって」

しずりはいった。

「ま、みんな色々あるよ」

藤原がいうと、坂本がまぜかえした。

「また結論、先にいつちゃって」

どっと笑いがあがった。

居酒屋をでたあと、四人は藤原が知っているという金町のスナックに移動した。二十代から三十代の男ばかりの店員しかない店で、深夜は地元のキャバクラ嬢や風俗嬢が遊びにくる、安いホストクラブのような店らしい。

藤原はその店の「社長」の先輩らしく、安く飲ませるという約束をとりつけていた。

カラオケがあり、関口がまず歌った。それほどうまくはなかったが、手拍子と歌い終わてからの拍手に、関口は頬を染めて喜んだ。

つづいて坂本が歌ったのは、ハンゲルが画面に映しだされる韓国のポップスだった。歌詞の意味はわからないが、歌唱力はなかなかのもので、立ちあがってフリつきで歌うという力の入りぶりに皆は圧倒された。

「すごい。坂本さん、韓国語ペラペラなんですな」

「歌だけよ。あたしこのグループが大好きなの」

「いやあ、うちの店でこの歌うたったお客さん、初めてですよ」

ガリガリに痩せた胸をはだけた二十代の従業員がいうと、坂本はまんざらでもないような笑みを見せた。

藤原が歌った。誰もが知る男性アイドルグループの歌で、合唱になった。相当歌いこんでいる。

「こちらのお客さんは？」

マイクを向けられたしずりは首をふった。

「駄目なんです、まったく」

「本当はすげえうまかったりして」

従業員がのぞきこむようにしずりの目を見た。一瞬、岬人を思いだした。安っぽいスーツを着て胸もとをはだけ、金のネックレスをこれみよがしに光らせて、先のとがった革靴をはくこの若者と岬人はどこも似ていない。

すべてがちがう。近いのは年齢くらいだろう。

だがそのとき、しずりは自分がまた岬人に会いたいと願っていることに気づいた。

なぜだ。母親ほど、とはいわないが、十五以上も年齢が離れている若者のことを、どうして自分は気にしているのだろう。

前田の息子だからなのか。

ちがう。岬人が前田の息子でなければ、もつと自分は屈託なく彼に接することができた。

だが前田という人間の存在がなければ、自分と岬人のあいだには何の接点もない。

気づくと、周囲の人が皆、しずりを見ていた。

「大丈夫？」

従業員がなれなれしい口調で訊ねた。不意に黙りこんだしずりに、空気が固まってしまったようだ。

「ごめんなさい」

しずりは笑顔を作った。

「ちょっと酔っただけですから。それと藤原さんの歌があんまりうまかったんで」

「よくいうわよ。じゃまた歌っちゃうよ」

「お願いします！」

藤原に救われた。

四人は十時まで、そのスナックで飲んだ。

居酒屋もスナックも全員で割り勘だったが、驚くほど安かった。二軒で、ひとり頭五千円に達しない。

金町の駅から京成線に乗る坂本と関口と別れ、しずりはJRに乗りこんだ。藤原は、金

町の実家に泊まるようだ。

しずりの住居は、J R 田町駅に近いワンルームマンションだった。

OLになって四年で、初めて同僚と飲みにかけた。疲れはしたが、後悔はない。

電車の中でなにげなく携帯電話を見た。どきり、とした。

仲本岬人からの着信記録が表示されていた。

墓参りの帰りに入った喫茶店で、しずりは岬人と電話番号の交換をしていた。別れぎわ、岬人が訊ねたのだ。

田町駅でJ Rを降りたしずりは迷った。いったい何の用事だろう。まず思ったのは、岬人の母親のことだった。離婚したとはいえ、前田の息子を生んだ女性だ。前田の死の責任を、しずりに問おうとしているのではないか。

前田えりのように男女関係を疑って非難することはないかもしれないが、岬人に対する養育費などが、前田の受傷、さらには死亡で滞り、苦境に追いこまれた可能性はある。

気が重かった。それ以外の理由で岬人が自分に電話をかけてくるとは思えない。

電話番号の交換などしなければよかった。あの場の岬人はとても感じがよかった。だからつい、乞われて番号を教えてしまったのだ。だが、岬人には母親がいる。その母親まで

もが、岬人と同じような好意を自分にもつとはとうてい思えない。

携帯電話を手にしたまま、折り返す勇氣もなく、しずりは歩いた。

田町駅をでて、細長い住宅街の路地に入る。住居のワンルームマンションまでは徒歩で十分ほどだ。

着信は午後十時八分で、ちょうど金町駅の雑踏の中にいた頃だ。留守番電話サービスを利用してはいない。

唇をかみ、ボタンを押し耳にあてた。部屋に逃げこむ前に、岬人の母親からの非難をうけておこうと決心した。歩きながら話し、屋外にいると相手に伝われば、そう長くならないかもされない。詫びの言葉を口にしつづけ、通話が終わったら電源を切って部屋に逃げこもう。

これから年末年始の休みに入る。そのあいだずっと、電話の電源を切っておけばよい。休みのあいだは何の予定もなかった。実家の両親とは、たまに電話で話すだけだ。すぐ近所に兄夫婦がいるので、寂しいと感じることはないようだ。

二度の呼びだし音のあと、

「はー」

と岬人の声が応えた。背景は静かだった。やはり家にいるのか。家で母親と二人なのだ

ろう。

「牧です。お電話をいただいたみたいで」
足を止め、いった。

「先日はどうもごちそうさまでした」

岬人はいった。コーヒー代をしずりが払ったことをいつているようだ。
「とんでもない」

「実は、ちよつとうかがいたいことがあつてお電話したんです。ご迷惑だったでしょうか」
「いえ」

答えながら心が沈んでいく。

「何でしょうか」

「僕、今、チーター便の配送センターでバイトをやっているんです。そこで知りあつたドライバーさんがいて、もしかするとその人が先日、お話をうかがつた方じゃないかと思つたんですが……」

「ドライバーさん？」

一瞬、言葉の意味がわからなかつた。チーター便は宅配業者だ。

「君津さん、といいましたよね。その、犯人をはねてしまつたトラックドライバーの方」

「ええ」

「君津、何という方でしょう」

思ひだせない。

「今はちよつと……」

「そうですね。こんな暮れの時期に申しわけありません」

「いいえ。あの、その方が？」

「牧さんは、君津さんの人生もおかしくしてしまつたと後悔していらつしやいました。でも、僕が知っている君津さんなら、今はとても明るい、というか、昔のことを気にしているようすはないので、牧さんにそれをいつておこうと思つて……」

君津という姓はありふれているわけではないが、同姓の別人という可能性だつてある。

だが岬人が、しずりの後悔をそこまで気にかけてくれたのは意外だつた。

「そんな……。ありがとうございます」

「もちろん別人かもしれないので、ちがつていたらかえつて申しわけないのですけれど。」

その人も長くドライバーをやつてらつしやる方みたいで。君津政一というんです。政治の政に一と書いて」

記憶の中でひつつかかるものがあつた。確か、村内をはねた君津の下の名も「〇一」といつ

たような気がする。

「すみません、変な電話で」

沈黙しているしずりに、岬人は早口でいった。

「いえ、大丈夫です」

「牧さんには思いたしたくないこと、ですよ。本当、ごめんなさい。もう切ります。あのう、よいお年を」

「いいえ。よいお年を」

電話が切れ、しずりはほっと息を吐いた。よかった。非難の電話ではなかったのだ。

安堵すると同時に、怒りとも悲しみともつかない感情がこみあげてきた。いったいいつまで、自分はこうして罪悪感に怯えなければならぬのか。

自分に罪は本当にあったのか。それすら、今となってははつきりわからない。助けられたのは事実だ。だがそのことでこんなにも非難に怯え、償いの言葉を口にしつづけなければならぬとわかっていたら、いつそ助けられなくてよかった。

殴られ、あるいは階段からつき落とされていたとしても、そのほうがよほどまだ。

岬人に過去のできごとを話したのは軽率だった。卑怯かもしれないが、自分が牧しずりではないと嘘をついてでも、あの場を逃れるべきだったかもしれない。

前田に息子がいた、とわかった驚きで、しずりの心はその選択肢を失った。かわからない、話さない、と決めた、しずりの生きかたに反する行動をとってしまった。愚かだった。

自分を呪いながら自宅に着いた。路地と路地のすきまにたった、まるで鉛筆のようなマンションのロビーをくぐる、オートロックはない。小さなエレベーターで三階にあがった。部屋は各階にふたつずつしかない。隣室に住んでいるのは、髪を明るく染めた、おそろくはホステスカ風俗嬢で、まだ二十を越えたかどうかという年だろう。めったに顔を合わせることとはなく、会っても互いにそっけない挨拶をかわすだけだ。

エレベーターを降り、部屋に入った。細長く狭い部屋は、玄関に立ったとたん中のすべてを見通せる。

三和土をあがってすぐ小さなキッチン、その先左手にユニットバス、六畳ほどの部屋。シングルベッドと小さなコタツで床の大半は埋まっている。作りつけのクローゼットにおさまるくらいしか衣服はもっていない。

陽あたりの悪い部屋は、むしろ廊下より冷えているような気がした。

明りをつけ、ブーツを脱いで、まずはコタツに入った。煙草の箱をひきよせ、一本抜いて火をつける。今夜は、同僚たちの前で吸わなかった。

壁ぎわの小さなテレビ台にのった電話のランプが点滅していた。留守番電話に誰かがメッセージを残したのだ。それを再生するのに勇気がいった。一度気分が落ちこむと、すべてのできごとが悪い予兆に思えてくる。

煙草を吸い終え、再生ボタンを押した。

「——さん、あ、母さんだけど」

ピーという信号音の終わりを待たず話した母の声を聞き、わずかにほっとした。

「どうするんだい。貴志たちは元日からくるといってるんだけど。あんたは帰ってくるの。連絡して」

母はずりの携帯に電話をしてこない。携帯にかけてもめつたにつながらないから、というのがその理由だ。実際、会社にいるときは直接、留守番電話サービスにつながるようにしている。夕方以降はこの部屋にいることが多いので、よほど緊急の用事でない限りは家の電話でこと足りる。

録音されたのは、午後八時十分だ。今の時間はおそらく寝ている。

しずりは大きく息を吐いた。シャワーを浴びるのも億劫だった。それでも下半身がわずかにあたたまるとコタツをでて、エアコンのスイッチを入れ、部屋着に着がえた。

これから一週間、何の予定もない。実家は福井だった。帰ろうと思えば、いつでも帰れ

る。だが帰る理由もない。

冷蔵庫に入っていた紅茶のペットボトルをだし、牛乳と合わせてミルクパンであたためた。それをカップに注ぎ、コタツに再びもぐりこんだ。

テレビを観たいとも思わない。そろそろしい笑い声や勇壮なコマーシャルソングなど絶対聞きたくなかった。

部屋の中は静かだ。この静けさが一番いい。

バッグから携帯電話をとりだし、電源を切った。ようやく外界との扉が閉ざされ、安全地帯に逃げこめたような安堵を感じた。

何も考えず、ミルクティをすすった。コタツの上にノートパソコンがある。ネットオークションでたまにバッグや靴を買う。どんなものでも新品を買うほど余裕のないしずりには、ネットの中古品売買は役に立っている。

だが今はネットの世界に逃げこむほどの気力もなかった。久しぶりに多くの人と話をしたことで、精も根もつき果てたような気分だと思った。

いや、ちがう。本当は忘年会が理由などではない。自分は楽しんでた。歌えといわれたときは閉口したが、それ以外のできごとはずべて予想以上に楽しかった。焼きとんもおいしかったし、藤原や関口のやりとりもおもしろかった。どちらかといえば地味で、課内

での存在感を自分と同じように薄くしている彼女たちひとりひとりの個性を感じられ、あたり前のことだが、人のそれぞれに軽い感動すら覚えた。

疲れたのは疲れた。だがこの重い気分は、決して彼女たちのせいではない。

岬人の言葉によって思いだした過去のせいなのだ。わかりきっている。

君津の下の名がどうであろうと、今はもうどうでもよいことだ。